

ムージルの「ボルガーへのインタビュー」

——「高い特性のある男」ボルガーについて——

長谷川 淳 基

Musils „Interview mit Alfred Polgar“
Oder Polgar als „der Mann mit hohen Eigenschaften“

Junki HASEGAWA

I 始めに

1926年3月5日付リテラーリッシュ・ヴェルト紙にムージルのエッセイ「ボルガーとのインタビュー」が載った。同紙はこの日、演劇批評家イエーリング、ボルガー、ケルの三人についての特集を組んでおり、ムージルのエッセイはボルガーについて、その人物ぶりと批評スタイルを巧みに報告していた。

この日の紙面全体は、ワイマル時代の批評家勢力図の縮図ともいうべきものであり、この点に関してはすでに別の稿で論じた。本論の論旨であるが、同紙のムージルのインタビュー記事を再度取り上げ、批評家アルフレート・ボルガーがムージル文学に及ぼした影響について考察するものである。

II ボルガーのエッセイ、ウィーンとベルリンへの視点

その1 エッセイ「誕生日」について

リテラーリッシュ・ヴェルト紙に載ったムージルの「ボルガーとのインタビュー」は現在のムージル全集版で6ページに及び、エッセイとしては内容もさることながら、量的にも大きなものである。そのエッセイの中ほどあたりで、ムージルはボルガーの批評スタイルについてこう解説している。

彼は非難したいと思う事柄に対しては、わざと好印象のまん真ん中を、さあどうぞと気分良く歩きまわらせる。そうしておいて賞賛の言葉の衣装をこっそりと裏返しにして、歩き回る当人へ着せてやる。こうした一筋縄では行かない短い文章は例外なく、その真ん中の部分にウィットを、たいていの場合は大笑いさせられるようなウィットを持っている。しかしながらこのユーモアを分析することは断念せざるをえない。私としてはここで、二つの忘れ難い例を紹介しようと思う。ボルガーがつい先ごろ50歳になったとき、一そしてドイツの文筆家にとって確実にこのことは、その直後からやってくる苦しくも滑稽な状況の始まりとなるらしいのだが一彼は自身の誕生日に関する文章を次のように書き始めて見事に窮地を逃れたのであった「多くの方々から寄せられた祝辞に、一つずつお返事することは私としては当然のことなのであります。でも、こうした手段

だけは絶対に利用しないのであります。……」。もう一つの方はしばらく前のことになるがオーストリアの教権主義者たちが、好事家の役人すなわち作家業にも手を染めている宮廷顧問官ミレンコヴィッチにブルク劇場の運営を委ねたとき、この人物は滑稽なことに、燦然と輝くキリスト教的ゲルマン人ものをひっさげて人々の前に登場したのであった。が、ボルガーはある文章のしかるべき場所で彼をブルク劇場のガルテン・ラウベ、庭のあづまやと名づけた以外には何をしたわけでもなかった。ボルガーのこの言葉は（ラウベという名前が、その価値判断は措くとして、ウィーンの演劇史において何を意味するかを知っている必要があるが）その後の長く続き、事実また実りもあった論争の発端となったわけである。ボルガーの批評の柔和さと無関心の風についてであるが、パリス・ギュタスローの表現を借りるならば、ボルガーの作品は金銀の線を使った「フィリグリー」からできているとのことで、なるほどその通りである。(P. 1158)

ムージルはボルガーのユーモアの質について分析する代わりに、ボルガーのエッセイを2本紹介したいという。しかし、紹介されているボルガーのエッセイの中身がもう一つ伝わってこない。読者としてはより詳しい説明が欲しいところである。これについてはムージルの配慮が働いていると考えられる。ボルガーのエッセイ「誕生日」は発売されたばかりのエッセイ集「上からのオーケストラ」に収められていた。目から鼻に抜けるエッセイを書くことで知られるボルガーであるが、この秀逸なエッセイを味わいたいと思う者は、直ちに書店に走って行くべし、ムージルにはそういう気持ちがあったのであろう。エッセイの内容について前もって種を明かし、しゃれの落ちを解説するような無粋はムージルには無縁であったが、この点とは別に新刊書の売れ行きについて、いささかなりともボルガーを応援したいとの気持ちがムージルに働いていたと考えられる。ムージルの記憶に刻まれることになったボルガーのエッセイ「誕生日」¹⁾の全貌は以下のものであった。

誕生日

アルフレート・ボルガー

祝っていただいたばかりの私の50回目の誕生日は、実のところ私の50回目の誕生日ではなかったのである。事情についてはいわく言いたいところがあった。その間の誤解については私のあずかり知らぬところであり、そのため私の側としてもこれに異を唱えることは差し控えていただいた。何となれば、祭りの日が到来したから祭りの行事が実施されるということだけではなく、祭りの行事が実施されたがゆえにその日を本来の祭りの日と見なしでもよいのである。要するに作家たるもの、人々の記憶に好ましいものとして立ち現れるためには、必ずしも拾という数字で割り切れる必要はない。我々のような輩が日々の出版物で話題にされる場合に、唯一のシステムとして十進法があるだけというならば、いささか残念という他はなからう。

そういうわけで私は、事実とは相違した50回目の誕生日を祝ったのであったが、その気楽さたるや、事柄の全体について何の関係も有しないことを見物している人間のそれ、その場に居合わせながら状況については超然としている一人の人物の気楽さなのであった。私は第三者として参加しているという奇妙な気持ちを抱きながら、とは即ち自分自身が納められているお棺の後ろを歩いていく葬儀参列者ともいべき気持ちで、私の揺りかごの背後を楽しい祝い事への参加者として歩いたのであった。

私の葬儀ふうの誕生祝いは、夏の日を思わせるような素晴らしく晴れ上がった秋のある日に行われた。いたるところ窓は開け放たれ、人々が心を日の光にさらすこと、あたかも植木鉢を雨にさらすがごときであり、木々の黄色い葉は自らを金色と心得て上機嫌であるらしく、やがてやって来る落葉についてはついぞ考えなかった。ベルリン動物園のヒヒはいつも以上に苛立ち興奮し

ており、道路は人々の活気に、いやまさに溢れんばかりの熱気にむせ返り、とは言え、交通整理をする男たちが発揮している優しさは、森の内気な小鳥たちもその腕になら止まってみようと思うほどであった。もっともこれについては森の小鳥というものがベルリンにいればのことであるが。

この町で私はその特別の日を過ごしたというわけである。刺激的で独創的な、決して人を魅惑するのではなく、むしろその激しい動きの結果として遠心力が働き、その風圧によってあらゆる人を仕事や労働に圧しつける町。この町は大変に大きいのでベルリンから出発してベルリンに至るまで快適な旅行が楽しめる。当地での生活は文字通り流れており、それゆえに沼地を形成することなど思いもよらない。この点については、ウィーンからやってきている人間についても同じである。ベルリンの定住者はウィーンの2倍、居合わせている人間の数でいうならば10倍であり、このことでは我が柔和なる故郷の町のように心地よく魅惑的というわけには行かない。しかしながらベルリンの空気を長い間吸わないでいると、この厳しい町のことを想って妙に沈んだ気持ちになる。この欲求は、いとおしい恋人の傍らにあって、ときに冷厳な友人のことを懐かしく感じることに似ている。要するに、ベルリンという町にあっては50年間を生きていないのに50歳の年齢に達するということが、すなわち、突然「やあ！ 50年間過ぎましたよ！」との知らせで目を覚まされて、その後はうろたえながら「だとすると、すっかり寝過ぎてしまったにちがいない！」と返事をするばかりであるといったことが、そうそう起こりはしない。

誕生日の当日、人々はみな親切で、私がそれまでに感じていたことを気にしないでよかったことについてはありがたかった。祝辞もいただいたが大半はお年を召された方々からであった。が、それらの祝意には奇妙な響きがこもっていた。「どうぞ、中へ！」と宗教か政治のグループに新会員として招き入れられたものの、彼らはとうから私が来るのを待っていたのであって、他人の不幸を陰で笑うような気味が無くもなかった。そして、とどのつまり「一体全体あなたはどなたですか」との言葉が浴びせかけられるのである。

この真面目な時代にあって今や笑いのネタのないあるユーモア作家からの便りには「次の50年に入ったことに、おめでとうと言えはいいのでしょうか？ それとも最初の50年間が終わったことについて、でしょうか？」とあった。また麗しきL. D. さんからはナスを一ついただいた。これは何を意味しているのだろうか。

幾つかの新聞もこの日について気付いてくれた。現世での私のさすらいの時間を評価してくれたもののうち二つの記事が目についた。一方は素っ気なく、10年間あたり1行の記述であった。他方はずっと詳しいものであり、今は亡きある同僚の才能と力量について真心のこもったねんごろな言葉を書き連ねている。

私の誕生日に鳴り渡った他の新聞の声のうち、私が耳にしなかった分も、おそらくは親身な論調であって、不愉快な内容のものは皆無であったと思われる。仮にそういうものがあったなら私の元に届けられていたはずである。例えばターク紙に載った年齢どおりの私の似顔絵であるが、私に宛ててなんと23枚も届いているのである。

もう一言だけお願いしたい。私の誕生日を覚えていてくれたすべての方、お一人ずつにお礼を申し上げようと考えているところであるが、ただし今言及した方法だけでは何としても避けたいという私の真意についてはご了承願いたいのである。

このエッセイは8連から成っている。第1連と第2連では、祝ってもらった50歳の誕生日について、実は50回目の誕生日ではなかったとボルガー自身が告白し、その折の苦しくもあり複雑でもあった彼の心境が綴られている。ボルガーは1873年10月17日生まれである。1925年10月17日、ウィーンのターク紙、プラハのプラーガー・タークブラット紙など各紙はボルガーの50回目の誕生日を祝う記事を載せた。しかし、ボルガーは52歳であった。ボルガーは年齢を2歳若く偽っていたのであった。

「私の葬儀ふうの誕生日」から始まる第3連と第4連では、ウィーンとベルリンの町が比較され論じられている。ボルガーはこの年1925年からは文筆家としての活躍の場について、その比重をウィーンからベルリンに移していた。

「誕生日の当日」から始まる第5連、6連、7連は誕生日の祝われ方がどのようであったか、この点が具体的に紹介されている。知人や友人たちが寄せてくれた祝辞の調子からすると、皆は自分つまりボルガーが年齢を偽っている事実を知りながらも、表面ではそうした事実には気付かないふりをしているのかもしれない、とボルガーは脛に疵持つ者の不安を語っている。お前は実際にはもっと年寄りなのだ、と皆が一様に非難の声を発しているのかもしれないとボルガーは想像する。そうした恐れのお気持ちにとって一番の打撃は郵便で送りつけられてきたボルガーの似顔絵であった。実際よりもずっと老けた顔のボルガーのスケッチ画が、祝辞に添えて送られてきたのである。

最後の第8連で、ボルガーはすべてを郵便のせいにする。郵便制度さえ無ければ、自分はこんなに不愉快なそして不安な思いをしないで済んだのである。郵便はそういう意味で悪いものであり、それを知っている自分としては頂いた祝辞への返事に、受け取る人の気持ちを忖度してこの手段だけは利用したくないとボルガーは言う。こうしてボルガーは返事を書く手間を省略することにまんまと成功した、そうムージルは報告している。

その2 ウィーンとベルリンを描く「高い特性のある男」

このエッセイの内容について考察することにしよう。「他方はずっと詳しいものであり、今は亡きある同僚の才能と力量について真心のこもったねんごろな言葉を書き連ねている」祝辞を書いたのはジークフリート・ヤーコプゾーンであった²⁾。ターク紙とブラーガー・タークブラット紙に同時に発表されたヤーコプゾーンのこのエッセイであるが、見出しのタイトルからは誕生日の祝辞とは分らない。タイトルは「ある50歳男性への愛情表明」であった。そうした主旨の祝辞であることはエッセイ冒頭に置かれた献辞から、すなわち記事の本文はボルガー50歳の誕生日を祝う文章である旨の告知から分かるのであるが、その献辞の活字は大変に小さなものが使われている。

ボルガーが嘆いている点は決して誇張ではない。ヤーコプゾーンは今は亡き批評家ヴィリー・ハンドルについて延々と書いている。ヴィリー・ハンドルについて書いた文章にボルガーがついでに言及されているかのようであり、ボルガーの誕生日はフィクションであり、存在しないことを皮肉っていると見ることもできる。ボルガーは見事一本取られたことを認め、今やこれまでと降参して「誕生日」のエッセイに取り掛かったのであろう。「誕生日」のエッセイの書き出しはそうしたように読むことができる。

ムージルであるが、彼はこのユーモラスではあるが、ユーモアの域を超えて危ない部分がなくもないやり取りに関わることをしない。ムージルがボルガーは窮地を脱したと説明しているのは、ボルガーが祝辞の返事を書く手間から巧みに逃れたことを言っている。なるほどボルガーは巧みである。

さて、しかしながらムージルの印象に残ったものはエッセイのそうした展開の妙だけであつたろうか。着想の速さとそれを表現する飛躍の手法、それはこのエッセイに限られるものではない。「小形式の文豪」と称されたボルガーである、どのエッセイにもこうした風な巧みさの魅力は備わっている。

このエッセイならではの魅力、それはウィーンとベルリンを比較した箇所であろう。ムージ

ルのこの時期の関心が、ボルガーならではの最小の文章に切り取られている。最小の文章というだけならば、ケルがいる。しかしケルにはウィーンとベルリンとの比較という視点はなかった。北と南、スカンジナビア半島とイタリア半島といった見通しについて、あるいはヨーロッパとアジアの比較への視点を有して、それらを極小のサイズで表現する術をケルは知っていた。今、ボルガーのエッセイがムーゼルの興味を掻き立てた点、それはウィーンとベルリンという豊穡な二つの文化世界が、小さく切り取られ巧みに再現されている様であったろう。ウィーンをぐうたら主人公オブローモフのように描くボルガーのほろ苦いユーモアは、ウィーン人ならではの味わいに富む。

このボルガーのエッセイ「誕生日」はヤーコブゾーンへの意趣返しとして書かれた。ムーゼルが懇意にしているターク紙とプラーガー・タークブラット紙に同時に掲載されたヤーコブゾーンのエッセイについても、当然にムーゼルは熟知していたはずである。そうでなければ、ボルガーのエッセイの面白さは分かりようがないのである。誕生日を祝うと言いつつ、誕生日を祝う表現を避け、はぐらかすヤーコブゾーンの奇妙なエッセイであるが、最後のくだりではさすがに前半の50年に続けて、後半の50年も頑張ってください、とボルガーに声をかけるのである。このときに、ヤーコブゾーンはボルガーに「高い特性のある男」と呼びかけるのである。ヤーコブゾーンへの会心の応酬エッセイ「誕生日」は、「高い特性のある男」によって書かれたのであった。

ボルガーのエッセイ「誕生日」がムーゼルの脳裏に刻み込まれたことは当然といえば当然であった。

Ⅲ ボルガーのエッセイと「捕まえにくい男」

その1 エッセイ「ゲオルク・テラマーレ：静かな時間」について

エッセイ「ボルガーとのインタビュー」を書いたムーゼルはもとよりボルガーの目を意識している。ボルガーに対する配慮の念を抱きながらムーゼルがこのエッセイを書いていることはどの行、どの言葉からも窺うことができる。言及されているボルガーの二つ目のエッセイ「ゲオルク・テラマーレ：静かな時間」³⁾を読んでみることにしよう。

ゲオルク・テラマーレ：静かな時間

アルフレート・ボルガー

プリンツ・オイゲン — この御方は橋を建設させ、この橋のことは例の有名な歌となって称えられ、この歌はウィーンにおいて1914年7月27日から総動員の当日まで特に頻繁に歌われ、この後はそれほどではなくなったが — このプリンツ・オイゲンは自ら率いる将校の結婚については壊すことを旨としていた。彼はすべての将校に結婚許可を与えなかった。そうした中で彼の姪、飛び切り魅力的なのであるが、彼女が修道院の生活を終えて親元に戻ってきた — で、どうなるか？ 偉大なる元帥の老いらくの恋。彼は娘にぞっこんになり、彼女と「マリアージュ」しようと決心する。こう決心するにあたっては、宮廷による彼への陰謀が彼の背中を押すことになる。その陰謀については国事詔書が一役買っている。いきさつのすべてはウィーンの理髪店員が発端であった。彼は以前にプリンツのライバルの家に奉公していたのであるが、今はプリンツのお抱え理髪師になることを目論んでいる。この男は新しい主人に重要な秘密事項を漏らす。これがもとで、元帥と皇帝の間に諍いともいふべき事態が生じる。元帥はオーストリアでの職を辞す。彼はその後、家庭の幸福を享受しようとする。彼は素晴らしい「静かな時間」が到来したと思う。

国事詔書が繰り返し問題にされ、ヴィンディッシュ・グレーツ伯爵なる人物も登場するに及び、この喜劇作品は揺りかごに揺られることになる。喜劇の表面に歴史の息が吹きかけられる。歴史に関心がある観客に向けて、多くのオーストリア貴族の名前が効果を挙げる。そら、観客席は競馬クラブのお歴々の笑い声に満ちている。

さてその姪御さんであるが、彼女は老元帥を愛してはいない。お相手は元帥の若き副官である。自らの結婚計画を応援してもらおうと、彼女は高貴なる騎士に甘える。彼の方は彼女が自分に心底好意を持っていると独り合点する。軍を離れることは彼にとって容易なことではない。幕切れ — 第2幕の —、この場面が呼び起こす感動は『粉引きの親方とその子供』の多くの場面にも引けをとらない。プリンツ・オイゲンは金色の甲冑に身を包み元帥杖を片手にして、近衛連隊の行進に耳を傾けている。姪が言う「おじ様が泣いている!」。お付きの者らも含め全員が静かに部屋を出て行く。蛇足ながら、情緒たっぷりに部屋に差し込む夕日も十二分の効果を上げた。

幸いにもプリンツには同年配の女友達がいた。彼はパッチャーニ伯爵夫人とは20年来、トラップの結婚ゲームを楽しんできた。作者は二人にこのゲームを始めさせる。ゲームの用語(「クィーンを手に入れる」、「切り札を出す」、「勝負を投げる」等々)に裏の意味を持たせているところは、笑わせられる。この賢明な女友達は、姪御の母親すなわち彼女に輪をかけて聡明な母親からの後押しも受けて事態を動かし、結果プリンツ・オイゲンは姪と副官の結婚に祝福を与える。その他、彼はこの見事な女友達の働きかけにより、再び軍務に服することになる。

濠々たるパウダーシュガーが、国家と恋愛を主題にした物語を包み込み、この物語が感動と文学性と人生智に包まれているところは、言うなれば生クリームをのせた昔風の素晴らしいロールケーキである。言葉にも何ら苦いところはない。可愛い姪が偉大なる叔父に、戦争での活躍の様子を聞かせて頂戴と言うと、彼は彼女の頭を、小さな頭を両手に包み込むようにして言う、「いいや。わしの小さな太陽が真っ赤な血の雲に覆われるのは、わしとしては何とも忍びないのじゃ」。この通りに言う。

この静かな時間のおかげで、私もおセンチになってしまった。ブルク劇場が新監督のミレンコヴィッチと挙行した結婚はまことにアモールによるマリアージュ、相思相愛の感情的結婚であったわけで、決して理性的結婚ではなかった。私としては「静かな時間」は全くの駄作であると確信しているが、ミレンコヴィッチについては、彼はブルク劇場の第二のラウベであるとの期待を込めて召集令状をもらったことがはっきりと分かった。彼はかの上品な奥様に家庭画報「ガルテン・ラウベ」なのであった。

このエッセイの全体は6連で構成されている。その展開は非常に単純である。

第1連から第4連までは、テラマーレの芝居のストーリーが順を追ってなぞられる。そして第5連では、この作品全体が甘ったるいセンチメンタリズムに溢れていることが指摘される。そして結びの第6連である。連想がひらめいたかのごとくに、突然にボルガーはこの芝居をブルク劇場の舞台に掛けた新監督について論じるのである。

その2 「捕まえにくい男」を捕まえるムージル

こちらのエッセイで分析すべき点は、センチメンタルな芝居をとりあげて論ずるボルガーの真意と、彼の有する「高い特性」に関することである。

先に引用したように、ムージルはエッセイ「ボルガーとのインタビュー」で、このエッセイに関して要約している。こうしてボルガーのエッセイの全体を読めると、ムージルの主張の主旨がより鮮明に理解できる。ボルガーのこのエッセイについて、ムージルはボルガーがミレンコヴィッチの人事を皮肉ったことだけに言及しているのだが、ムージルがボルガーのエッセイの全般的な特徴として書いている部分、すなわち引用の最初の部分「彼は非難したいと思

う事柄に対しては、わざと好印象のまん真ん中を、さあどうぞと気分良く歩きまわらせる。そうしておいて「……」の叙述は、テラマーレの芝居を扱ったこちらのエッセイの解説であったことも分かるのである。

テラマーレの作品が詳細にそして巧みに解説されているものだから、我々読者は、これは面白い芝居だな、ボルガーはこの作品が一見の価値ありと言っているのだろうな、などと思う。そうではなかった。最後のくだりで突如としてブルク劇場の人事が言及される。ここに至るまで、エッセイがこうした風に展開するとは想像できない。どんでん返し、ボルガーはテラマーレの芝居もさることながら、何よりもこれを演目にとりあげたミレンコヴィッチを皮肉たっぷりに退けてエッセイを締めくくる。

ムージルの解説が興味深い。ボルガーのエッセイは、お涙頂戴ものについてその文学性の浅さを笑っていると読むことができるのだが、ムージルの解説の重点は民族的そして宗教的に偏向したイデオロギーの指摘にある。果たしてボルガーは、家庭画報「ガルテン・ラウベ」の小市民性と相通ずる雰囲気を持つテラマーレの芝居がセンチメンタル—辺倒に流れており、その点が気に入らないと主張しているのであろうか？

ムージルはボルガーの内心を理解している。お涙頂戴ものが悪いのではなく、お涙頂戴ものにかこつけた偏狭な民族イデオロギーが悪い、これがボルガーの主張の要点であったがボルガーはこれを口にしない。プリンツ・オイゲンものの芝居の詳細な紹介、ブルク劇場の観客の興味を引いている幽霊ものの当たり芝居『粉屋の親方とその子供』⁴⁾の不気味な雰囲気との類似性への言及、とボルガーは我々読者を引っ張りまわす。ボルガーは実のところ安直な感傷性を好む。彼の仕事の最良のものの多くは庶民のセンチメンタリズムに深い共感と理解を示している。好むからこそ、そして共感するからこそ、厳しい観察眼ともなるのである。

ルイ14世の隠し子とも噂のあったフランス出身のプリンツ・オイゲン公は、17世紀の後半から18世紀にかけてオーストリア軍を幾多の勝利に導いた。特に、二度目のトルコ軍撃破における彼の活躍ぶりを歌った俗謡と、ウィーン王宮前に設置されている馬にまたがる彼の記念碑により、プリンツ・オイゲンについては誰知らぬものはない。ゲオルク・テラマーレは20世紀の今、このオイゲン公の老いらくの恋を題材に新たに芝居を書き、芝居に加えてオイゲン公の俗謡のための新たな詩も書き下ろした。

第1次大戦はハプスブルク・オーストリアを瓦解させた。帝国は崩壊した。当然のことながらこの時期、古きよき時代を懐かしむ作品が多く生まれた。テラマーレのこの芝居もそうしたものの一つであり、ブルク劇場もこれらを好んで上演した。そうしたもののすべてをボルガーは退けたわけではない。しかしテラマーレのこの作品はよくない、とボルガーは判定した。民族的国粋主義に関しては勿論のこと、その品性のなさをボルガーは指摘している。テラマーレが作詞した「プリンツ・オイゲン・リートヒェン」⁵⁾についてもその点は指摘できる。そしてそれゆえに、この芝居は観衆を集めることができたのである。繰り返すが、ムージルはボルガーがあえて直接言わなかったところを理解し、ボルガーのエッセイのこうした部分についてははっきりと書いた。

ボルガーは、なかなかその本心を垣間見せない点でなるほどムージルいわく「素手で川のマスを捕まえる」(P.1155)よりも捕らえるのが難しい人物なのである。こう確信するムージルは、そうであるからこそ、彼としては珍しいことではあるがボルガーの心の内にある思想信条に関する見解を、ボルガーに代わって明確にしたのである。ボルガーを素手で捕らえたのである。こうしたことがムージルに可能であった理由は、ムージル自身がボルガーに深く共鳴する

ものを持っていたからであったことは、勿論のことである⁶⁾。ポルガーにとっても、ムージルの解説は印象深いものであったことだろう。

IV 結び 「高い特性を持った男」と「特性のない男」

ムージルは自らの畢生の大作のタイトルを「特性のない男」とした。特性がある、特性がない、これらの言葉がムージルにあってどのような意味を持っているかは、ムージルに興味を持つ読者の誰もが必ず一度は疑問に思うところである。読者もさることながらムージル自身にとって最重要な問題点であったろう。心の深いところに厳しい主張を持っていながら、その本心をあからさまにはせず、そのエネルギーだけを別の局面、別のテーマに投入し、それでいて内心の主張を決して忘れていないポルガーのエッセイ。こうしたポルガーについて、ヤーコプゾーンは「高い特性を持つ男」と名付けた。ポルガーという人物に触れながら、すなわち捕まえにくい人間であり、しかし高い特性を持った人間について考察する中で、ムージルは「特性のない男」とは有り余る特性を持つ男でもあること、そして特性のある町ベルリンと特性のない町ウィーンの「平行運動」についても、あらためて認識を深めたものと思われる。

注

使用したテキスト並びに引用文献

Musil, Robert: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (本文中に P. と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) Polgar, Alfred: *Geburtstag*. In: Polgar, Alfred: *Kleine Schriften*. Bd. 3, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1984, S. 373-376
- 2) Jacobsohn, Siegfried: *Liebeserklärungen an einen Fünfziger*. Prager Tagblatt, 17. Oktober 1925, S. 4
- 3) Polgar, Alfred: *Georg Terramare, Die stille Stunde*. In: Polgar, Alfred: *Kleine Schriften*. Bd. 5, S. 143-145
- 4) Raupach, Ernst: *Der Müller und sein Kind*. Hamburg (Hoffmann und Campe) 1835
- 5) Terramare, Georg: *Ein Prinz Eugen Liedchen*. Wien (Hugo Herrer) 1914
- 6) Weinzierl, Ulrich: *Alfred Polgar, Eine Biographie*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1995, S. 137

Education et pluriculturalisme

Hélène Hamana

A l'automne 2005, la banlieue parisienne s'enflamme. Les violences urbaines commencées à Clichy-sous-Bois le 27 octobre, s'étendent à d'autres banlieues pauvres à travers la France. L'état d'urgence est déclaré le 8 novembre pour une période de trois mois.

Comment en est-on venu là ? Que nous enseignent ces événements sur la société française d'aujourd'hui ? Les émeutes, qui ont duré trois semaines, ont consisté en l'affrontement des jeunes des banlieues défavorisées et des forces de l'ordre : voitures incendiées, actes de vandalisme, cette période de violences urbaines a été la plus importante agitation que le pays ait connu depuis mai 68. Au départ de l'embrasement, la mort accidentelle de deux jeunes de Clichy-sous-Bois, qui, pourchassés par la police avaient trouvé refuge dans un transformateur électrique, et les paroles de Nicolas Sarkozy, alors ministre de l'Intérieur, promettant de nettoyer "la racaille" des banlieues "au kärcher". Les jeunes français issus de l'immigration qui vivent dans ces quartiers populaires se sentent méprisés et rejetés par la société française. La grande majorité d'entre eux n'a pas de travail. La misère économique, l'absence de perspective, les discriminations à l'embauche et au logement sont des faits quotidiens. Les institutions officielles, police, écoles, sont perçues comme une extension de l'exclusion qui les frappent.

Cet article n'a pas pour but d'analyser les problèmes auxquels se heurte la France mais d'étudier le rôle que tient l'école dans la création d'une société pluriculturelle, au moyen d'enquêtes menées auprès de plusieurs établissements scolaires de la région parisienne. Deux enquêtes sur l'école française et le pluriculturalisme ont été effectuées auprès des directeurs et des principaux d'écoles primaires et de collèges de la région parisienne. A la lumière des réponses obtenues — ou non obtenues — je vais essayer de lever un pan du voile qui recouvre l'école de la France pluriculturelle d'aujourd'hui.

Déroulement des enquêtes

Les premières enquêtes ont eu lieu entre le 5 septembre et le 10 septembre 2006. Une série de lettres, auxquelles étaient joints les questionnaires, avait été adressée auparavant à plusieurs établissements de la banlieue sud de la région parisienne, sélectionnés suivant les deux critères suivants : zone résidentielle favorisée et zone résidentielle défavorisée. Le laps de temps très court de 5 jours et les circonstances (5 septembre, rentrée des classes) ne permettant pas d'espérer obtenir de nombreux entretiens avec les chefs

d'établissements fort occupés en cette période de l'année, une enveloppe timbrée pour la réponse était jointe à chaque demande d'entrevue, l'enquête pouvant ainsi être renvoyée ultérieurement. Les établissements choisis étaient:

1. l'école élémentaire François Peatrick, le Plessis Robinson (zone résidentielle favorisée)
2. l'école élémentaire Buffalo, Montrouge (zone résidentielle favorisée)
3. l'école élémentaire Thomas Masarick, Châtenay Malabry (zone résidentielle défavorisée)
4. le collège Louis Hachette, le Plessis Robinson (zone résidentielle défavorisée)
5. le collège Henri Barbusse, Bagneux (zone résidentielle défavorisée)
6. le collège Joliot-Curie, Bagneux (zone résidentielle défavorisée)

Une seule réponse positive est venue de l'école élémentaire François Peatrick, m'accordant une entrevue le 6 septembre 2006. Au cours du mois de novembre, une lettre contenant le questionnaire rempli, m'est parvenu de l'école Thomas Masarick. Les quatre autres établissements n'ont pas donné suite à ma requête.

La deuxième série d'enquêtes a eu lieu au mois de mars 2007. Des courriels avaient été envoyés à plusieurs établissements le mois précédent, auxquels étaient joints les questionnaires. Les établissements choisis étaient:

1. L'école élémentaire Nicolas Boileau, Montrouge (zone résidentielle favorisée)
2. L'école élémentaire Raymond Queneau, Montrouge (zone résidentielle favorisée)
3. Le collège Maurice Genevoix, Montrouge (zone résidentielle hétérogène)
4. Le collège du Haut-Mesnil, Montrouge (zone résidentielle favorisée)
5. Le collège Joliot-Curie, Bagneux (zone résidentielle défavorisée)
6. Le collège Marie Curie, Sceaux (zone résidentielle favorisée)

Les réponses positives sont venues de l'école élémentaire Nicolas Boileau, du collège Maurice Genevoix et du collège Marie Curie. La principale du collège Joliot-Curie a refusé de m'accorder un entretien, prétextant "la difficulté extrême" des questions posées et me souhaitant bonne chance pour mener à bien "une tâche aussi immense" (sic !).

Les écoles visitées ont donc été en l'espace de six mois:

1. L'école élémentaire François Peatrick, le Plessis Robinson
2. L'école élémentaire Nicolas Boileau, Montrouge
3. Le collège Maurice Genevoix, Montrouge

L'école élémentaire Thomas Masarick m'a renvoyé le questionnaire rempli.

Le principal du collège Marie Curie m'a fait savoir par courriel en février, qu'il me recevrait le 16 mars 2007 à 10 heures. Le jour-dit, sa secrétaire, surprise de ma visite, m'a annoncé que "Monsieur le Principal" était absent pour la journée et n'avait laissé aucune instruction concernant notre entretien.

Analyse des enquêtes

1) Combien y a-t-il de classes par niveau dans votre établissement ?

N. Boileau : 12 classes; 2 à 3 par niveau

F. Peatrick : 12 classes en tout; 3 CP, 3 CE1, 2 CE2, 2 CM1, 2 CM2

T. Masarick : 11 classes; 3 CP, 2 CE1, 2 CE2, 2 CM1, 2 CM2

M. Genevoix : 5 classes de 6ème, 4 de 5ème, 4 de 4ème, 4 de 3ème

Les écoles primaires, N. Boileau et F. Peatrick comptent le même nombre de classes par niveau. T. Masarick, bien que dans une zone défavorisée, compte une classe de moins que les deux autres écoles.

2) Combien y a-t-il d'élèves par classe ?

N. Boileau: environ 30

F. Peatrick: 3 CP; 17 élèves

3 CE1; 17 élèves

2 CE2; 27 élèves

2 CM1; 27 élèves

2 CM2; 27 élèves

T. Masarick : entre 20 et 25

M. Genevoix : 6ème; 24/25, le reste environ 30

Le nombre d'élèves par classe est inférieur à 30, les petites classes ont en général des effectifs inférieurs à ceux des classes supérieures.

3) Combien y a-t-il d'enseignants dans votre établissement ?

N. Boileau: 14 enseignants à plein temps (+1 maître surnuméraire), dont la psychologue scolaire

F. Peatrick: 12 enseignants à plein temps (+1 maître surnuméraire), dont la psychologue scolaire

T. Masarick: 16 enseignants; 1 par classe + 1 maître surnuméraire à mi-temps, + la psychologue scolaire, + 3 enseignantes spécialisées, + la directrice

M. Genevoix: 35 enseignants pour 479 élèves (+1 documentaliste)

Le nombre d'enseignants à T. Masarick est supérieur à celui des autres écoles élémentaires et compte 3 enseignantes spécialisées. Les enseignants sont plus nombreux dans le secondaire que dans le primaire car le nombre des matières enseignées est supérieur dans le secondaire.

4) L'élargissement de l'Union Européenne a-t-il accru le nombre d'enfants d'origine étrangère dans votre établissement ?

N. Boileau : non

F. Peatrick : non

M. Genevoix : non

T. Masarick : non

Il y a ici consensus sur le fait que l'élargissement de l'Union Européenne n'a eu aucun effet sur l'accroissement des enfants étrangers à l'école. Il est à noter qu'en septembre la

Roumanie et la Bulgarie ne faisaient pas encore partie de l'Union Européenne. Ces deux pays sont entrés dans l'Union le 1^{er} janvier 2007.

5) Y a-t-il dans votre établissement des enfants dont la langue maternelle n'est pas le français ?

N. Boileau : oui

F. Peatrick : oui

M. Genevoix : oui

T. Masarick : oui

6) Si oui, quel est leur nombre et leur langue maternelle ?

N. Boileau : arabe (Maghreb), portugais, espagnol (Espagne et Colombie), russe et Pays de l'Est

F. Peatrick : coréen, néerlandais, créole (Haïti)

M. Genevoix : arabe (Maghreb), Afrique

T. Masarick : (*Question laissée sans réponse*)

Le nombre des enfants étrangers n'est jamais mentionné. A N. Boileau et à M. Genevoix, les enfants parlant l'arabe sont mentionnés en premier. Cela ne veut pas dire que ces enfants soient de nationalité étrangère. Ils peuvent fort bien être issus de l'immigration et de nationalité française. Par contre, les enfants coréens, néerlandais et haïtiens de F. Peatrick ne sont pas de nationalité française. Les enfants russes et des pays de l'Est font partie de familles qui ont fui leur pays pour des raisons politiques. Il n'y a pas d'enfants maghrébins à F. Peatrick.

7) Ces enfants ont-ils des difficultés à suivre les cours ?

N. Boileau : oui, un peu

F. Peatrick : non, sauf un petit coréen

M. Genevoix : oui (causes : familles mono-parentales, garçons plus turbulents que les filles, origine d'Afrique/du Maghreb)

T. Masarick : non

Pour ce qui est de F. Peatrick, il s'agit d'un enfant coréen en grande difficulté psychologique, non due à l'apprentissage de la langue française.

8) Y a-t-il des cours de rattrapage en français ?

N. Boileau : oui, en CLIN

F. Peatrick : pas obligatoires, rattachés au RASED

M. Genevoix : non

T. Masarick : oui, au niveau des CE2

Les CLIN (classes d'intégration) sont "des structures d'initiation permettant l'accueil et l'intégration des enfants non francophones nouvellement arrivés¹⁾.

Les RASED sont des réseaux d'aides spécialisées aux élèves en difficulté. "La mission de prévention pour les membres des RASED va jusqu'à concourir à la recherche d'un ajustement des conditions de l'apprentissage dans la classe²⁾.

1) Site du Ministère de l' Education Nationale

2) Ibidem

9) Y a-t-il des enfants qui ne sont pas de culture française ?

N. Boileau: oui

F. Peatrick: oui

M. Genevoix: oui

T. Masarick: oui

Le but de cette question était de faire une différence entre les enfants étrangers et les enfants français d'origine étrangère, issus de l'immigration.

10) Si oui, quel est leur nombre et leur culture d'origine ?

N. Boileau: (*Question laissée sans réponse*)

F. Peatrick: (*Question laissée sans réponse*)

M. Genevoix: (*Question laissée sans réponse*)

T. Masarick: environ 60 en provenance d'Algérie, du Portugal, de Yougoslavie, du Congo

11) La présence des enfants de culture étrangère pose-t-elle des problèmes dans la classe, dans l'école ?

N. Boileau: parfois

F. Peatrick: non

M. Genevoix: pas systématiquement

T. Masarick: non

N. Boileau insiste sur l'importance de la laïcité à l'école, rejetant par là-même tout problème fondé sur la religion et sa pratique.

Il n'y a pas de problèmes à F. Peatrick du fait du petit nombre d'enfants étrangers et de l'absence d'enfants français musulmans issus de l'immigration.

Réponse évasive de M. Genevoix qui insiste pourtant sur l'absence dans l'établissement de classes de niveau.

12) De quel ordre sont ces problèmes ?

N. Boileau: problèmes de discipline, d'orientation, d'échec scolaire, problèmes éducatifs

F. Peatrick: pas de problèmes

M. Genevoix: importance de la mixité, structure sociale hétérogène

T. Masarick: pas de problèmes

M. Genevoix insiste sur la difficulté à gérer la mixité garçons/filles et les problèmes provenant de l'hétérogénéité de la structure sociale composant l'effectif du collège.

13) Comment les gérez-vous au niveau de l'école ?

N. Boileau: conseil école/parents, pas de punitions, dialogue avec les familles

F. Peatrick: pas de problèmes

M. Genevoix: une conseillère principale d'éducation gère les élèves hors cours (absences, retards), conseil de discipline

T. Masarick: il existe pour chaque élève un carnet de règlement³⁾

N. Boileau privilégie l'importance du dialogue avec les familles et rejette le recours à un

3) Voir page annexe

système punitif pour gérer les problèmes au sein de l'école.

T. Masaryk est le seul établissement à posséder un "carnet de règlement". Il est peut-être bon de noter que cette école est considérée comme "difficile".

M. Genevoix, collègue ayant à faire à des adolescents parfois difficiles, gère les problèmes directement avec les élèves. Le conseil de discipline est la dernière instance punitive de l'établissement.

14) Quels sont les aspects positifs de la présence d'enfants de culture étrangère sur les enfants de culture française ?

N. Boileau : richesse culturelle

F. Peatrick : langue, altérité, respect des autres, éducation à la citoyenneté

M. Genevoix : (*question laissée sans réponse*)

T. Masarick : les échanges des cultures différentes sont d'une grande richesse et se font avec les médiatrices culturelles

N. Boileau et F. Peatrick sont d'accord pour louer la présence d'enfants de culture étrangère dans leurs murs. Les enfants étrangers, de par leur langue et leur culture sont une richesse culturelle immense pour leurs camarades. Leurs différences enseignent aussi aux enfants français l'existence de l'Autre et le respect qui lui est dû.

15) Quelles sont les relations des enfants de culture étrangère avec les enfants français ?

N. Boileau : pas de différence

F. Peatrick : homogènes

M. Genevoix : (*question laissée sans réponse*)

T. Masarick : très bonnes

N. Boileau et F. Peatrick sont d'accord pour dire que les relations entre enfants sont tout à fait homogènes.

M. Genevoix n'a pas répondu à la question.

16) Quelle influence la culture étrangère de ces enfants exerce-t-elle sur les enfants de culture française et vice-versa ?

N. Boileau : un enrichissement

F. Peatrick : c'est un apport

M. Genevoix : il n'y a pas d'osmose entre les enfants étrangers et les enfants français

T. Masarick : (*question laissée sans réponse*)

Se reporter ici à la réponse à la question 14 pour ce qui est de N. Boileau et F. Peatrick.

Pour M. Genevoix, les enfants étrangers et les enfants français ne se mélangent pas.

17) Les parents de culture étrangère font-ils partie des associations de parents d'élèves ?

N. Boileau : oui, mais pas en tant que représentants, dialogue

F. Peatrick : oui

M. Genevoix : question laissée sans réponse

T. Masarick : cela dépend des années

A N. Boileau et à F. Peatrick, les parents de culture étrangère font partie des associations de parents d'élèves. A N. Boileau, le dialogue avec ces parents est très apprécié et

valorisé, bien qu'ils ne fassent pas partie des représentants des parents au sein de l'association, sans doute pour des raisons de langue.

18) Si oui, comment décririez-vous les relations entre les parents de culture étrangère et les parents de culture française ?

N. Boileau : gros soutien

F. Peatrick : bonnes ; les Français aident les étrangers

M. Genevoix : (*question laissée sans réponse*)

T. Masarick : ils s'entraident

N. Boileau, F. Peatrick et T. Masarick sont d'accord pour apprécier l'entre-aide et le soutien qui unissent les parents français et les parents de culture étrangère.

En outre, N. Boileau et M. Genevoix ont formulé les commentaires suivants :

1. Le rôle des enseignants a complètement changé. Ils ne sont pas là seulement pour transmettre le savoir mais pour accompagner l'enfant : ils ont tendance à remplacer les parents occupés ailleurs (activité professionnelle) et qui se déchargent sur l'école.
2. On assiste à l'apparition de l'enfant roi, non adapté à la vie en collectivité.
3. L'école ne transmet plus seulement le savoir mais enseigne aussi maintenant les valeurs de la France et de la vie en société.

CONCLUSION

Si l'on en juge par le résultat de cette courte enquête, le pluriculturalisme à l'école ne semble pas poser de problèmes graves. Les directeurs d'établissements interrogés ont tous été très modérés et "politiquement corrects" en parlant des problèmes auxquels ils se heurtaient. On peut se demander cependant pourquoi l'école, qui est le creuset dans lequel se forme la société, n'en reflète pas davantage les problèmes.

Il est évident qu'il existe en France un vrai malaise de l'école, que l'on dit "inadaptée aux réalités du monde du travail, inapte à réduire les inégalités..."³⁾, mais que les établissements scolaires, suivant en cela les consignes du ministère de l'Education Nationale, ne souhaitent pas étaler au grand jour. Taire les problèmes auxquels se heurtent les enfants et les enseignants est-il cependant la solution pour parvenir à une société adulte saine d'où "la racaille" disparaîtra sans avoir été nettoyée au "kaercher" ?

Cette enquête, rédigée en deux temps, est bien sûr insuffisante pour tenter d'effectuer une analyse vraiment pertinente de l'école en France et de son influence sur les événements qui secouent la société française. Il est cependant à noter que, malgré un questionnaire au contenu "très politiquement correct" (trop ?), de nombreux établissements qui avaient été contactés, ont refusé d'y répondre donnant comme prétexte la difficulté des questions posées. Par exemple, la principale du collège Joliot-Curie m'a envoyé le courriel suivant :

"J'ai été très surprise de recevoir votre courrier concernant votre recherche universitaire.

3) "Les Clés de l' actualite", 29 août au 4 septembre 2007

Les questions que vous posez sont déjà des items d'expérimentation à elles seules. Il faudrait mettre en place des protocoles expérimentaux pour isoler variable après variable, les effets de ces items.

Je suis dans l'incapacité de répondre à ces questions, puisqu'aucune expérimentation n'a été faite dans ce sens -là au collège.

Je vous souhaite "Bon courage" pour la suite de vos recherches, et vous prie d'agréer, Madame, l'expression de mes sincères salutations.

Mme Pluquet, Principale du collège Joliot-Curie."

Il n'est pas indifférent qu'il se soit en l'occurrence toujours agi d'établissements situés en zone difficile. On peut sans doute dire que par leur silence, ces écoles ont peut-être mieux répondu que par un long discours, dicté par la langue de bois du Ministère de l'Education Nationale. Plus de transparence aurait cependant été la bienvenue et aurait peut-être permis de lever un pan du voile qui dissimule mal une crise majeure bouillonnant dans les banlieues françaises.

ANNEXE

Extrait du règlement de l'école Thomas Masaryk :

REGLEMENT DE L'ECOLE THOMAS MASARYK

Voici ton carnet de règlement de l'école.

A l'école où l'on passe de longues heures, il faut apprendre à vivre ensemble pour que chacun s'y sente bien.

Les règles de vie contenues dans ce carnet doivent te permettre de mieux vivre à l'école, dans de bonnes conditions de travail et de sécurité.

C'EST LA LOI DE L'ECOLE, ELLE EST LA MEME POUR TOUS !

NOM :

PRENOM :

Signature de l'élève:

Signature des parents:

E 1

L'école est obligatoire, y compris le samedi matin.

J'arrive à l'heure: 8h30 le matin, 13h15 l'après-midi.

Tout retard sera sanctionné.

Au bout de 3 retards ou absence injustifiée, les parents seront convoqués par la directrice.

E 2

Je me range à la sonnerie.

Au bout de 3 rappels, j'aurai 10 minutes de récréation en moins.

E 3

Je dois respecter les locaux et le matériel de l'école pour le conserver en bon état (propreté, environnement, utilisation des balançoires...)

En cas de non respect, je ferai un travail d'utilité publique.

E 4

Je laisse les objets coûteux à la maison. Pour ma santé, je ne suis pas autorisé à emmener des bonbons, sucettes et chewing-gum à l'école.

En cas de non respect, ils seront confisqués.

E 5

Je me rends aux toilettes sur autorisation, et je *les laisse propres*. Je me déplace *toujours* calmement et silencieusement dans les couloirs pour respecter *le travail des autres*.

Au bout de 2 rappels, j'effectue un travail écrit à la maison.

E 6

Je ne me déplace pas dans l'école et n'en sors pas sans autorisation.

E 7

Je respecte les adultes comme ils le font avec moi.

E 8

Tout ce qui est *violent et dangereux est interdit* à l'école (bagarres, insultes, objets dangereux...)

En cas de non respect des articles E 6, E 7, et E 8, j'aurai une retenue après 16h15 et mes parents seront prévenus 48h à l'avance.

- En cas de récidive, et selon le cas, sur décision de l'équipe éducative, l'élève peut être exclu de sa classe, de un à trois jours, voire une semaine.
- En cas de récidive grave, sur décision de l'équipe éducative et avec l'accord de l'inspectrice de l'Education Nationale, l'élève sera exclu de l'école de un à trois jours, voire définitivement, avec accueil dans une autre école, selon le règlement départemental.